

6.長岡京跡右京第974次(7ANSID-6地区)

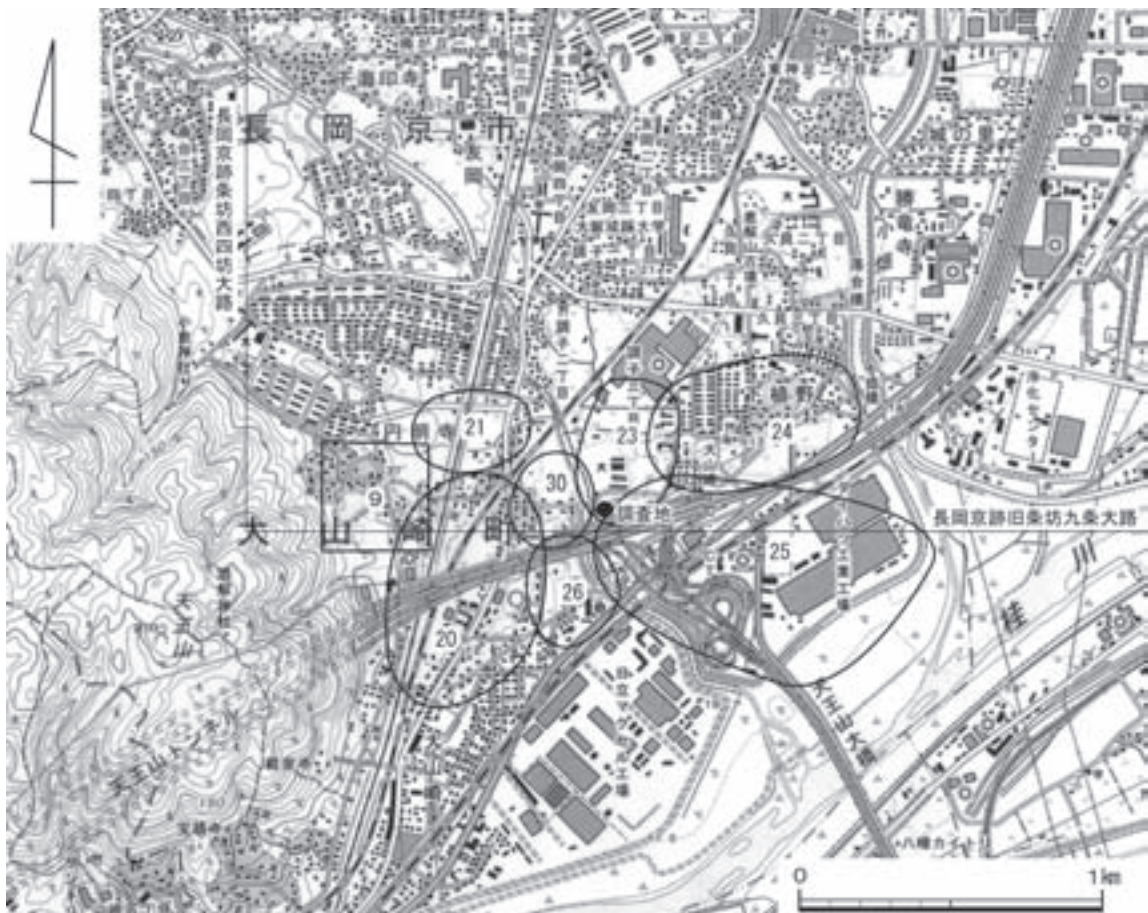
・松田遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、西日本高速道路株式会社関西支社京都工事事務所の依頼を受けて、京都縦貫自動車道整備事業に伴い実施した。

調査対象地は、乙訓郡大山崎町字円明寺小字一丁田地内にあり、長岡京条坊復原図によれば、旧条坊では右京九条二坊十三町にあたるが、新条坊では長岡京外となる。また、京都府・大山崎町遺跡地図によれば、縄文時代から中世にかけての遺跡である松田遺跡の範囲に含まれ、下植野南遺跡に接する位置にある。

調査対象地北側の大山崎中学校が、第二外環状線道路建設に伴い、改築されることになり、平成20年度に大山崎町教育委員会により新校舎建設予定地内の発掘調査が実施された(長岡京跡右



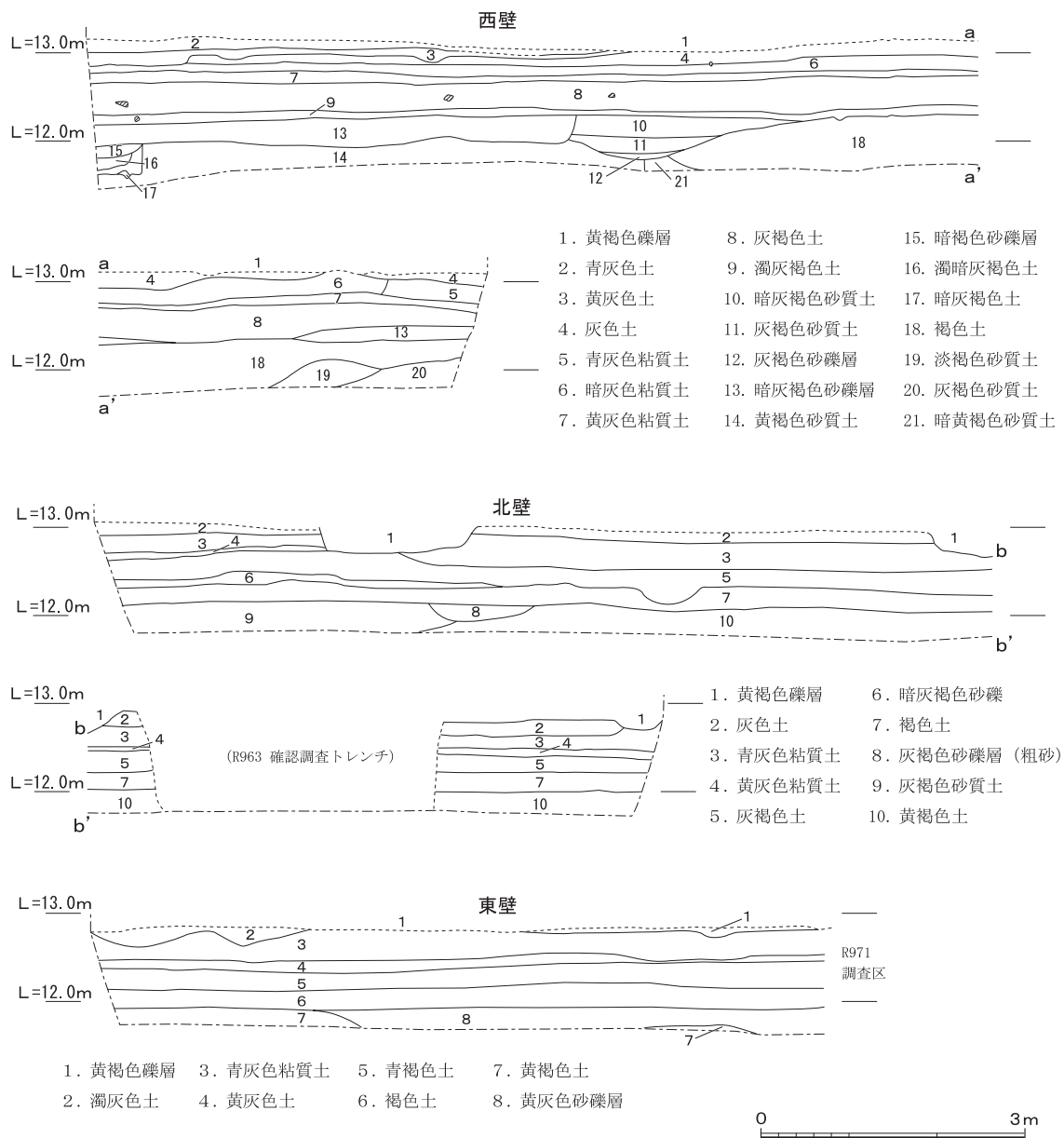
第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 淀)

23: 松田遺跡	25: 下植野南遺跡	24: 宮脇遺跡	30: 金蔵遺跡
26: 算用田遺跡	21: 久保川遺跡	20: 百々遺跡	9: 円明寺跡(九条家屋敷跡)

京第933次)。この調査で縄文時代から弥生時代の流路跡、土坑、古墳時代から飛鳥時代の竪穴式住居跡10棟・掘立柱建物跡4棟・流路・溝・土坑、中世から近世の溝・掘立柱建物跡3棟などが検出されている。

当調査研究センターでは、平成21年1月から3月にかけて、調査予定地内に遺構・遺物が存在するかどうかを確認するため、長岡京跡右京第963次として確認調査を実施したところ、古墳時代の竪穴式住居跡と推定される場所を2か所で検出した。今回の調査地は、右京第963次調査地の北半部分にあたり、右京第971次調査地の北側である。京都第二外環状線道路の橋脚が建設される地点にあたる。

現地調査は、調査第2課調査第3係長石井清司、専門調査員竹井治雄、同石尾政信が担当した。調査期間は平成21年6月1日から7月31日を要した。調査面積は300㎡である。現地調査および



第2図 調査地土層図

整理作業にあたっては、多くの方々の参加を得た^{注1}。また、京都府教育委員会、大山崎町教育委員会、地元自治会をはじめ多くの方々にご指導、ご協力をいただいた^{注2}。厚くお礼申し上げたい。なお、本報告書は石尾が執筆した。遺構図等に記した国土座標は、旧座標(日本測地系)である。

2. 調査の概要(第3図)

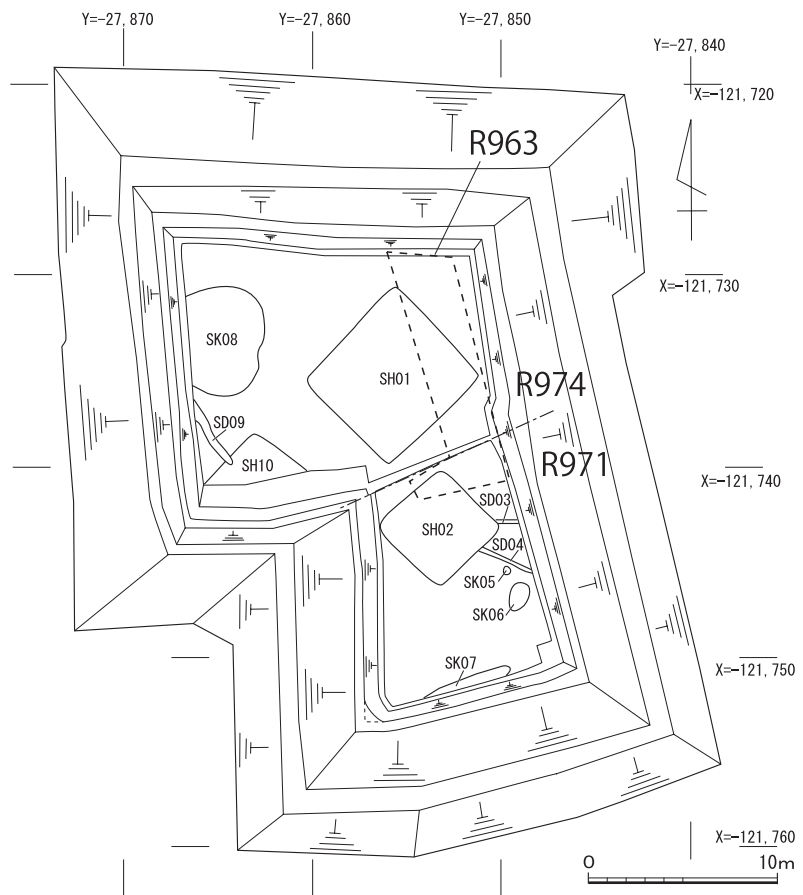
調査地は工場跡地にあたり、工場建設時の盛土層が約3mあり、その下には小泉川の氾濫による砂礫層が約2m堆積していた。まず、これらの上土を重機を使用して除去した。砂礫層の下に堆積する灰色土・青灰色粘質土と、その下の黄灰褐色土・褐色土、遺物包含層である暗褐色土の一部も重機を使用して除去した後、人力で掘削作業を行った。調査地の東部は、黄褐色粘質土をベースとして遺構が検出される。調査地の北部は、東から西へと黄灰色から青灰色に水分のために変色していく粘質土の上面で遺構が検出される。中央から南西では、黄褐色粘質土を挟み込んだ砂質土や砂礫混入土の上面から遺構が検出された。小泉川の氾濫による砂礫層からは、近世の陶器や土師器が若干採集できた。青灰色粘質土・黄灰褐色土からは、土師器細片がわずかに採集できたが、時期のわかるものはなかった。

検出した遺構には、竪穴式住居跡2か所(SH01・SH10)、土坑(SK08)、溝(SD09)と若干の小土坑がある。以下に検出した遺構について記述する。

3. 検出遺構

1) 古墳時代の遺構

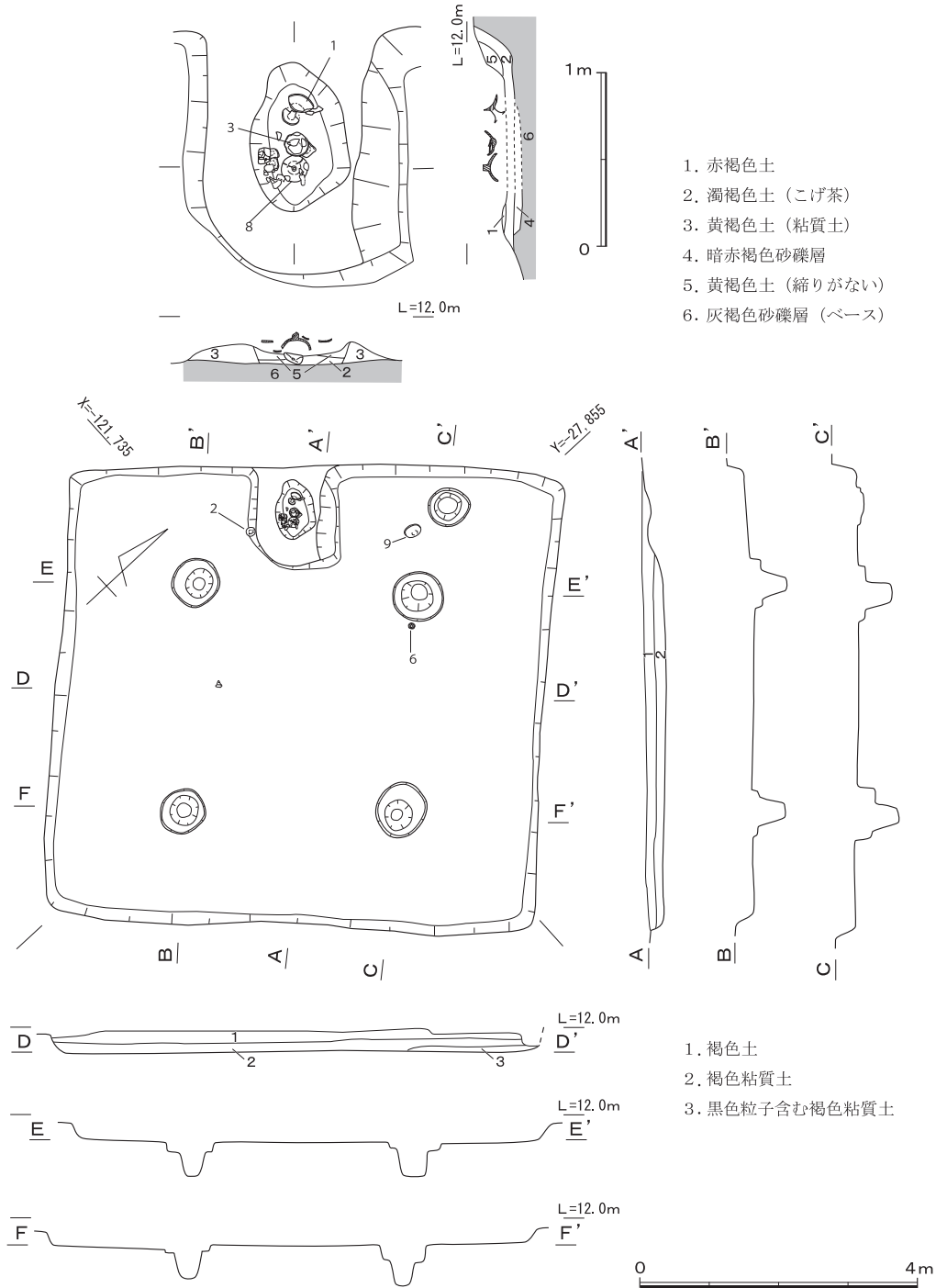
竪穴式住居跡SH01(第4図) 検出面からの深さ約30cm、6.6×7.1mの方形竪穴式住居跡である。中軸線が約43度西に振れている。直径約0.7mの支柱穴を4か所検出した。明瞭な周壁溝はない。北西辺の中央部に竈があり、竈の燃焼部中央から土師器高杯が長軸線に3個体が並んで出土した(第4図)。竈は北西辺側でベースである砂礫層を若干掘り窪め、その上に粘土を貼り付けて竈の壁体としている。竈は長さ1.5m、幅1.3mを測



第3図 調査地平面図

る。煙出しは不明である。竈の東側に直径約0.5mの浅い貯蔵穴があり、中から土師器片(第7図7)が出土した。竈の西側で土師器高杯(第7図2)や甕の体部片など、貯蔵穴の南で大型の土師器高杯(第7図9)が床面に接して出土したが、それ以外は土師器高杯(第7図6)などが点在する程度で、住居跡から出土した土器類は、右京第971次調査で検出した竪穴式住居跡S H02に比べ少なかった。

竪穴式住居跡S H10(第5図) 竪穴式住居跡S H01の南西で検出した。竪穴式住居跡の北東部分で、大半が調査地外に位置する。北西辺で3.8m、北東辺で3.5mを検出した。検出面からの



第4図 竪穴式住居跡S H01実測図

深さは0.25mを測り、周壁溝はない。調査範囲内で竈は検出していない。床面の北東部で直径0.4m、深さ0.3mの柱穴1か所を検出した。規模から支柱穴の一つと判断される。住居内の床面からは土師器高杯や須恵器が集中することなく、数多く出土した。この住居跡の北西辺は竪穴式住居跡S H01の北西辺と一直線に並んでいる。

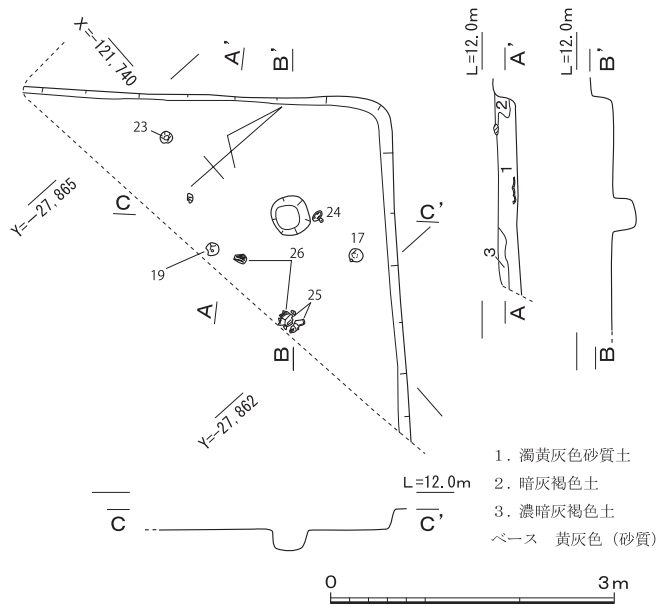
土坑S K08(第6図) 竪穴式住居跡S H10の北側で検出した、南北5.6m、東西4.5m以上、深さ0.5mの円形土坑である。埋土の2層目である黒褐色土からは土師器甕(第7図10)・須恵器高杯(第7図13)などの多くの土器が出土した。中央より北に土器が集中する傾向が見られるので、北側から流入したか、投棄されたものと推定される。後者の場合は、廃棄土坑と判断される。

2) 時期不明の遺構

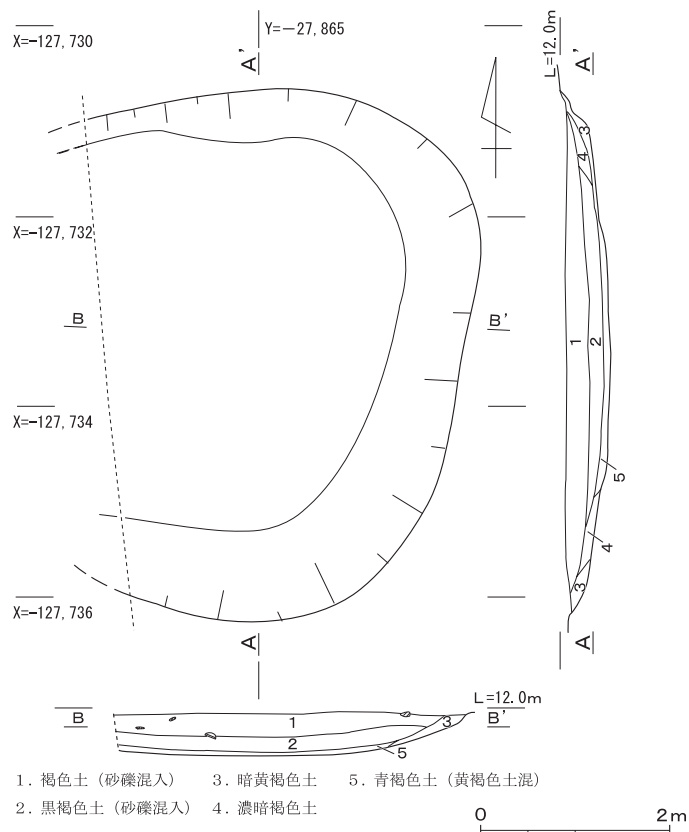
溝S D09 竪穴式住居跡S H10の北西辺の上位から掘り込まれており、北北西に延びる、幅0.4~0.2m、深さ0.1~0.2mの溝である。砂質土が堆積する。遺物は出土していないが、竪穴式住居跡S H10より後出するものである。

このほかに、竪穴式住居跡S H01と竪穴式住居跡S H10の間に、円形および不定形の小土坑があるが、柱穴と推定できるものはなく、砂礫層・砂質土の窪みに流れ込んだ土砂堆積と思われる。土坑の一部には土師器・須恵器の小破片が混入していた。

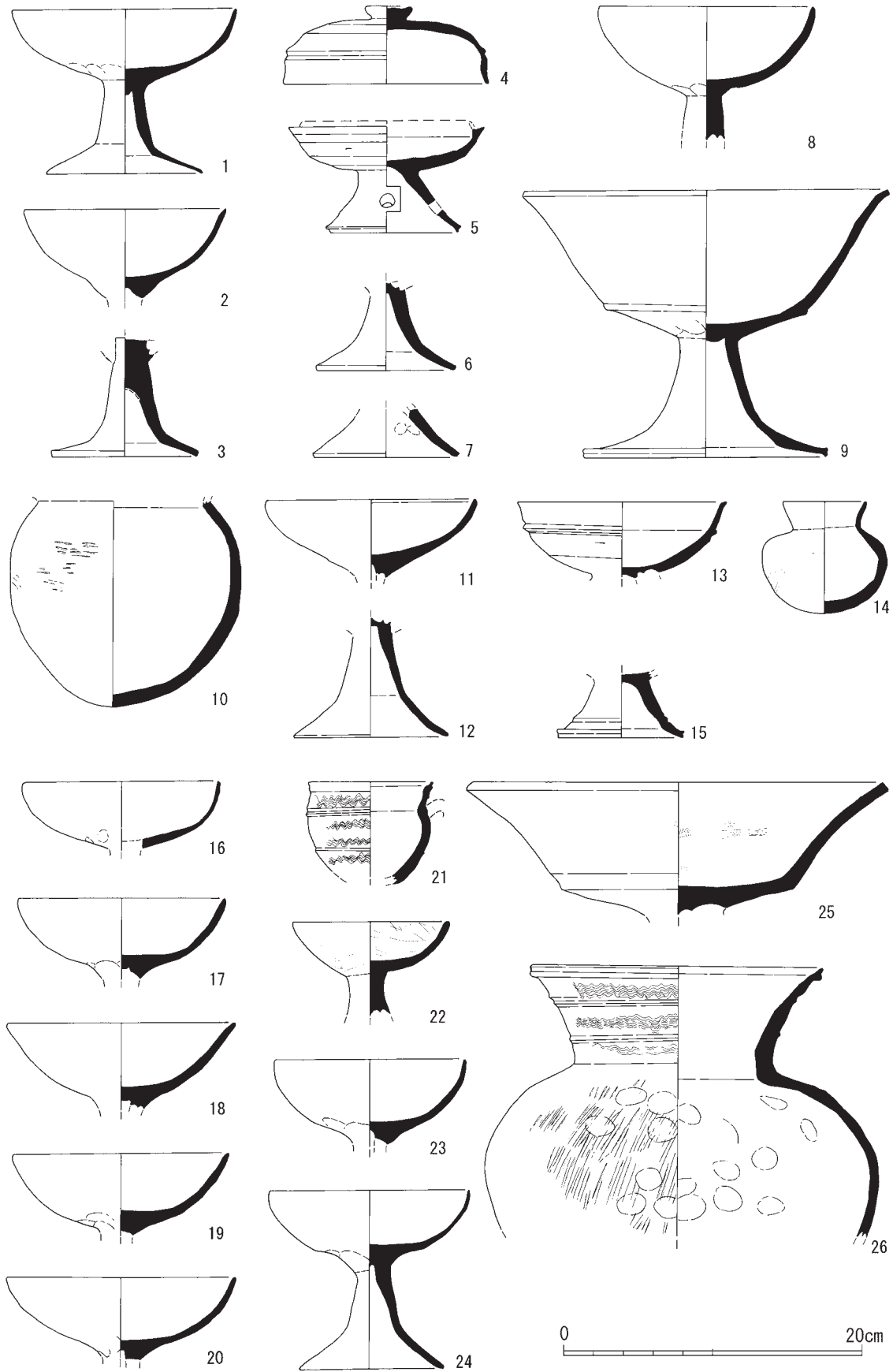
4. 出土遺物(第7図)



第5図 竪穴式住居跡S H10実測図



第6図 土坑S K08実測図



第7図 出土遺物実測図

出土遺物には、小泉川の氾濫による砂礫層から若干の土師器片などがあり、青灰色粘質土・灰褐色土などから少量の土師器片が出土したが、時期のわかるものはなかった。褐色土・暗褐色土からも土師器・須恵器が出土したが、凶化できるものがなかった。南西部の砂礫混入土からは、古墳時代の遺物が出土している。竪穴式住居跡S H01・S H10と土坑S K09から古墳時代の土器が出土している。以下に主な遺物について概述する。

1) 竪穴式住居跡S H01出土遺物

1は土師器高杯で、口径14.8cm、器高11cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色粒子を含み、元来は黄褐色であるが、被熱を受けて明赤褐色を呈する部分と煤が付着した部分が見られる。竈内の燃焼部から出土した。杯部は約70%残存しており、脚部は一部分を欠くだけである。2は土師器高杯の杯部で、杯部はほぼ完形で、口径13.4cmを測る。胎土に5mm以下の白・黒色の粒子を含み、淡赤褐色を呈す。竈の西側で出土した。3は土師器高杯の脚部である。底径9.8cmを測る。胎土に白・褐色の粒子を含み、黄褐色を呈す。竈の燃焼部内から出土した。4はツマミの付く須恵器有蓋高杯の蓋である。口径13.7cm、器高6.25cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色粒子を含み、焼成が良好で暗青灰色を呈し、天井部に自然釉がかかる。住居内埋土の上層から出土した。残存率は全体の約30%である。5は須恵器高杯である。受け部径13.2cm、残存高7.15cmを測る。脚部に円形の透孔がある。胎土に1mm以下の白・黒色粒子を含み、焼成が良好で淡灰色を呈す。住居内埋土の上面から出土した。残存率は約40%である。6は土師器高杯の脚部で、ほぼ完存している。底径9.3cm、残存高5.8cmを測る。胎土に2mm以下の黒色粒子を含み、淡黄灰色を呈す。住居内の北東柱穴の横で、床面から出土した。7は土師器高杯の脚部である。底径9.6cmを測る。胎土に白・黒色粒子を含み、黄褐色を呈す。貯蔵穴の底面付近から出土した。脚底部は完形に復元できるが、上部を欠く。8は土師器高杯の杯部である。口径14.2cm、残存高9.05cmを測る。胎土に白・黒色粒子を含み、外面が比熱して赤褐色を呈す。竈の燃焼部内から出土した。杯部はほぼ完形である。9は大型の土師器高杯である。口径24.2cm、器高18cmを測る。杯部はほぼ平坦な底部から45度程度に外方に立ち上がるもので、屈曲部外面に稜が付く。胎土に5mm以下の白・黒色粒子を含み、黒斑が認められるが淡赤褐色を呈す。口縁部内面の上半部に淡黒褐色の煤が付着し、口縁部外面の一部にも煤が付着する。貯蔵穴の南西で、床面から出土した。脚の約40%を欠くが、杯部はほぼ完形である。

2) 土坑S K08出土遺物

10・11・13は第2層中から出土した土器の実測図である。10は口縁部を欠く土師器甕の体部である。頸部径11.5cm、残存高13.8cmを測る。胎土に白・黒色粒子を含み、外面底部は被熱を受けて赤褐色を呈し、体部外面の中央部を中心に煤が付着する。内面は淡黒灰色を呈す。体部外面に粗いハケ目が残る。体部はほぼ完存している。11は土師器高杯の杯部である。口径13.8cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色の粒子を含み、淡黄灰色を呈す。杯部の残存率は約40%である。12は土師器高杯の脚部である。底部径8.2cm、残存高8cmを測る。胎土に1mm以下の黒・褐色粒子を含み、明褐色を呈す。上層の褐色土から出土した。脚部の約80%が残存している。13は須

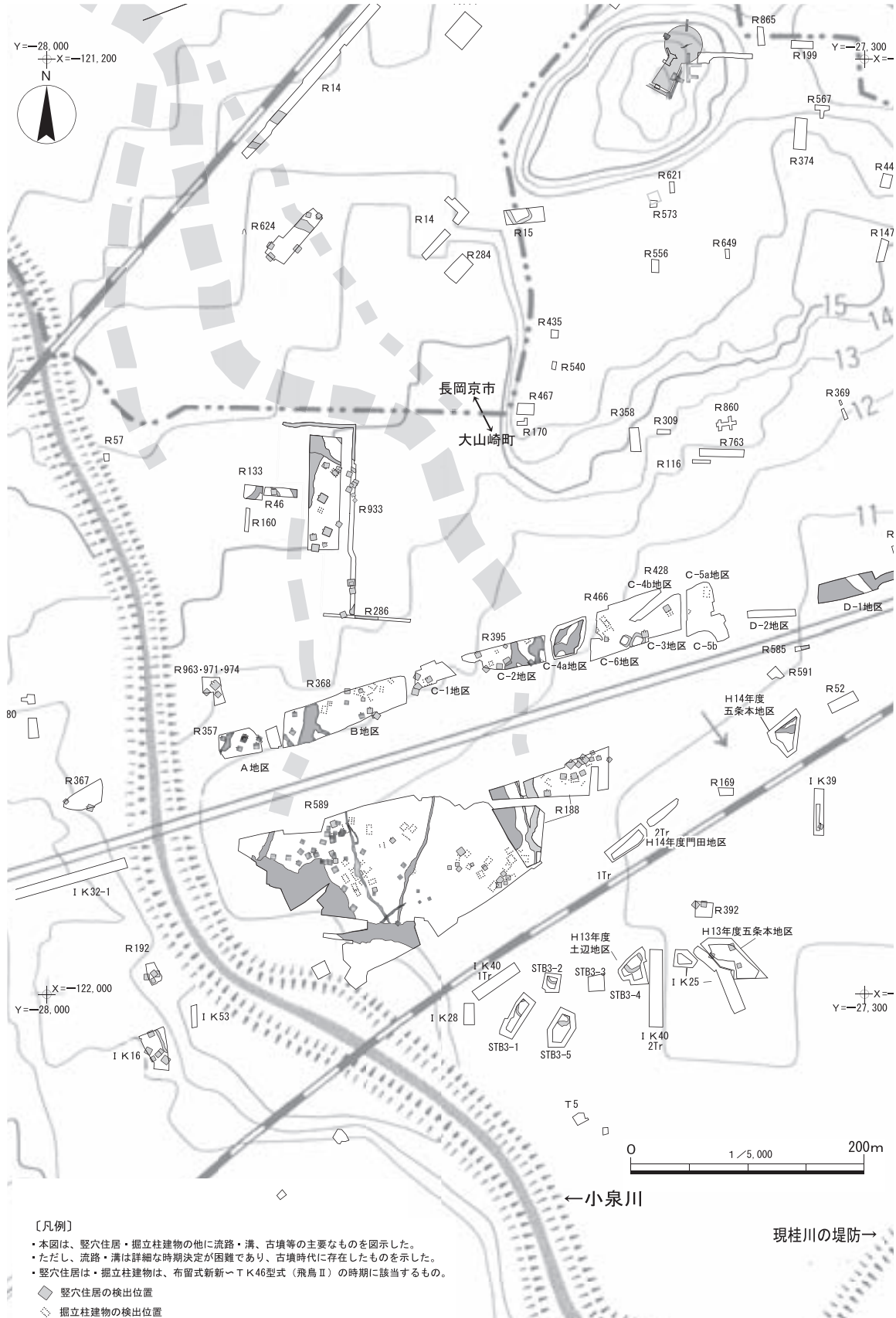
恵器無蓋高杯である。口縁端部から2cmの位置に稜が付き、口径13.9cmを測る。胎土に2mm以下の黒色粒子を含み、焼成が良く淡灰色を呈す。下層の黒褐色土から出土した。杯部の約60%が残存している。14は土師器小型丸底壺で、ほぼ完形のものである。口径5.5cm、器高7.55cmを測る。胎土に1mm以下の黒・褐色粒子を含み、焼成が良く乳白色を呈す。体部外面にタタキ目が残る。上層の褐色土から出土した。

3) 竪穴式住居跡SH10出土遺物

16は土師器高杯の杯部である。口径12.8cmを測る。胎土に5mm以下の白・褐色の粒子を含み乳黄色を呈す。ほぼ80%が残存している。床面から出土した。17は土師器高杯の杯部で、ほぼ完存している。口径13.8cmを測る。胎土に4mm以下の褐色の粒子を含み黄褐色を呈す。住居内床面の北東部支柱穴の東方で出土した。18は土師器高杯の杯部である。口径15.1cmを測る。胎土に4mm以下の白・黒・褐色の粒子を含み、黄褐色を呈す。住居内床面からやや浮いた状態で出土した。19は土師器高杯の杯部である。口径12.3cmを測る。胎土に5mm以下の白・褐色の粒子を含み、黄褐色を呈す。杯部はほぼ完存している。床面で出土した。20は土師器高杯の杯部である。口径15.2cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色粒子を含み、黄褐色を呈す。住居内西部の床面付近から出土した。残存率は約50%である。21はコーヒーカップ形で把手が付く須恵器碗である。把手は欠損している。口径8.2cm、器高6.85cmを測る。体部と頸部の境目と体部に低い断面が三角形の凸帯が廻る。頸部外面にハケによる波状文が1条、体部外面にも上段に2条の波状文と下段に1条の波状文が施される。胎土に1mm以下の黒色の粒子を含み、焼成が良好で灰色～暗灰色を呈す。残存率は全体の約70%である。床面からやや浮いた状態で出土した。22は土師器高杯の杯部である。口径10.3cmを測る。杯部の内面に粗いハケ目が残る。胎土に2mm以下の白・黒色の粒子を含み、淡赤褐色を呈す。柱穴内から出土した。杯部の約90%の残存率である。23は土師器高杯の杯部である。口径12.6cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色の粒子を含み、淡赤褐色を呈す。住居内西部の床面から出土した。杯部の約80%が遺存している。24は土師器高杯の杯部である。口径13.3cm、器高12cmを測る。胎土に3mm以下の白・黒色の粒子を含み、淡赤褐色を呈す。柱穴の東に接して床面から出土した。残存率は全体の約60%である。25は大型の土師器高杯の杯部である。杯部は平坦な底部から大きく外反しながら立ち上がるもので、屈曲部外面に稜が付く。胎土がやや粗く3mm以下の白・黒色の粒子を含み、明黄褐色を呈す。住居内南東部の床面から出土した。残存率は杯部の約30%である。26は須恵器甕である。口縁部外面に断面三角形の低い凸帯が2段にめぐり、凸帯の間に櫛描きによる波状文が施される。口径19.4cm、残存高17.9cmを測る。胎土に1mm以下の黒色粒子、4mm以下の白色粒子を含み、焼成が良好で青灰色を呈す。住居内南東部の床面から出土した。口縁部の約50%、および体部上半の約40%が残存している。

4) 包含層出土の遺物

15は須恵器高杯の脚部である。底径8.3cm、残存高4.4cmを測る。胎土に1mm以下の黒色粒子を含み、焼成が良好で淡灰色を呈す。竪穴式住居跡SH01と竪穴式住居跡SH10の中間の小土坑



が検出された地点の砂礫混入層から出土した。

5. まとめ

小泉川の氾濫で大量の土砂が運ばれ、今回の調査地に約2mの砂礫が堆積していた。この砂礫層が自然堤防となり、現在のように小泉川が固定される要因となったと推定される。その時期は、右京第963次調査・右京第971次調査で出土した遺物から近世江戸時代と判明している。

下層では古墳時代の竪穴式住居跡SH01とSH10、土坑SK08を検出した。竪穴式住居跡SH01の埋土上面から須恵器高杯、埋土上層から須恵器杯蓋が出土したが、床面からは土師器類が出土したのみである。竪穴式住居跡SH10の床面からは須恵器甕と土師器高杯などが出土した。

土坑SK08からは、下層から須恵器高杯の杯部や土師器高杯の杯部などが、上層から土師器小型丸底壺と土師器高杯の脚部が出土した。これらの出土遺物を比較してみると、小型の土師器高杯の杯部は椀形でよく似ている。土坑SK08は下層から出土した須恵器の無蓋高杯の杯部が陶邑TK208併行期にあたり、竪穴式住居跡SH10は、出土した須恵器甕と把手付椀の特徴から陶邑TK208～TK47の時期あたりにあたる。竪穴式住居跡SH01は、出土した大型の土師器高杯と竪穴式住居跡SH10の大型の杯部外面に稜が付き、小型の土師器高杯の杯部も椀形で共通する部分が多いので、若干の時間差はあるものの、ほぼ同時期と見てよい。竪穴式住居跡SH01・SH10、土坑SK08は陶邑TK208～TK47の時期、5世紀後半で古墳時代中期の終末頃の遺構と判断される。

隣接地の右京第971次調査で検出された竪穴式住居跡SH02が古墳時代後期の6世紀前半のもので、右京第974次調査の遺構と大きな時間差はない。竪穴式住居跡SH01・SH10・SH02は方位を揃えていること、大山崎中学校建て替えに伴う右京第933次調査で検出された古墳時代～飛鳥時代の竪穴式住居跡群も住居跡に明瞭な周壁溝がないことや、住居跡の主軸が西に振れていること、竈が北側に付設する傾向にあることなど共通点が多い。また、下植野南遺跡で検出された古墳時代の住居跡群も周壁溝を持たないものがほとんどで、竈の北側に付設するものが多い傾向にある。遺構検出の標高も北から南へと地形に合わせて下がっていくことが判明している。今回の調査で、両遺跡のほぼ中間点でも同様の竪穴式住居跡が検出されたことから、古墳時代中期～後期にかけて、松田遺跡と下植野南遺跡が一体となり、大規模な集落が営まれていたことがより明確となった。

注1 調査参加者 松元章徳・川原惇司・武本典子・福島厚子・荒川仁佳子・梶理恵子・松崎聖子

注2 大山崎町教育委員会 林 亨・寺島千春・古閑正浩

圖 版



(1) 調査地全景(北東から)



(2) トレンチ全景(上が北)



(1) トレンチ全景(北東から)



(2) トレンチ全景(南西から)



(3) トレンチ全景(北から)



(1) 竪穴式住居跡 SH01 全景
(南東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH01
竈周辺土器出土状況
(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 SH01
北西柱穴(南から)



(1) 竪穴式住居跡 SH01
土器出土状況(西から)



(2) 竪穴式住居跡 SH10
土器出土状況(北東から)



(3) 竪穴式住居跡 SH10
土器出土状況(南から)

(1) 竪穴式住居跡 SH01
竈検出状況(南東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH01
竈断割状況(南東から)



(3) 土坑 SK08 アゼ断面(北から)





(1) 竪穴式住居跡 SH10
アゼ断面(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 SH10
完掘状況(北東から)



(3) トレンチ西壁断面(東から)





京都府遺跡調査報告集 第 137 冊

平成22年 3 月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141